

スポーツ世界の原則：具体的事例への適用

The Principles of the Sport World: Applying to the Concrete Cases

森 田 啓*, 片 岡 暁 夫**

Hiraku MORITA * and Akio KATAOKA **

ABSTRACT

The purpose of this study is to apply the principles of the sport world that we suggested to representative, concrete sports cases. We can define sport as high-level sports competition such as Olympic Games.

The principles of the sport world that the present authors suggest are 1) to make the existence of human beings valuable in ordinary world and never to devalue it, 2) to respect the common good of sport world as the first step to recover the common good in ordinary world.

It was found that we need to consider the existence of future generations, to restrict the self decision-making authorities and to keep our economical desire under control. In the next century, to build up the real sustainable sport world and sustainable society we have to give 'to be' and 'the good' the higher priority than 'ought to' and 'the just'. We also have to accept the new sense of values that this study suggested and strict self controls. Based on the result of this study, sport world (especially Olympic Games) today that thinks promote the commercialism and protect the environment will be obliged to revise the policies.

は じ め に

間もなく20世紀も終わりを迎えるが、21世紀における人類最大の課題は「環境問題」であるといえよう。環境問題は、現在私たちが抱え込んでいる諸問題の一つというより、そうした諸問題の根源をなすといってよい¹⁾。なぜなら、それは人間存在をいかに確保するかということであり、人間存在なくして他の諸問題云々ではないからである。1992年にリオデジャネイロで開催された地球サミットは、環境問題を多くの人々の関心事とする大きな契機となった。スポーツ世界関係者も例外ではない。1994年のリレハンメル冬季オリンピ

ックは、オリンピック史上、最も環境に配慮された大会と評価されたし、2000年夏季オリンピックの開催都市にシドニーが、ライバルと目された北京を押さえて選出された際にも、シドニーが北京よりも汚染されておらず、環境に配慮した大会が実現する可能性が高いことが、シドニー勝利の一因であると言われている。このように、スポーツ関係者の間でも、環境への関心が高まりつつある一方で、相変わらず、スポーツイベント自体が環境破壊に加担している例も見受けられる。1998年長野冬季オリンピックの際も、滑降コース問題(スタート地点、ゴール地点の森林伐採)、高速道路や新幹線建設に伴うインフラ開発問題等、いく

* 国士舘大学体育学部附属研究所 (Institute of Health, Physical Education and Sport Science School of Physical Education, Kokushikan University)

** 国士舘大学体育学部スポーツ哲学研究室 (Lab. of Philosophy of Sport, Kokushikan University)

つかの環境問題が生じた。

以上の例からもわかるように、スポーツ活動が本来的に「善」とする幻想時代は過ぎ去り、環境にも配慮した活動が求められている。本研究では、筆者らが提唱する環境倫理思想に基づくスポーツ世界の原則²⁾を、代表的な具体的事例に適用することを目的とする。なお、本研究で考察対象とするスポーツ世界とはオリンピックである。

Ⅰ. 環境倫理思想に基づくスポーツ世界の原則

1. 「善と正」および「存在と当為」の優先問題

まず、倫理学上の難問である「存在と当為」問題および「善と正」問題に解答することで、筆者らの一般倫理学上の立場を明示しておこう。筆者らの立場は、当為に対する存在、および正に対する善をそれぞれ優先するものであり、環境倫理思想、特にハンス・ヨナス理論、および共同体論者の考えに依拠している。

環境倫理学は、アメリカを中心に発展してきたが、1970年代に、従来の自然保護から環境主義 (environmentalism) へという大きな思想的転換期を迎えた。その核心は人間中心主義の脱却である。さらに、自然と人間を単純に対立するものと捉えがちな環境主義を批判する環境的公正 (environmental justice)³⁾ が現在の環境倫理学を分析する上で不可欠である。「環境主義」と「環境的公正」は対立するものと捉えられがちだが、関根は、レオポルドによる人間倫理の発達理論に基づき、「環境主義」と「環境的公正」は決して対立するものではないと述べる⁴⁾。つまり、全生命の権利実現を目論む倫理と、そこへ方向を定めた人類解放的倫理とは、必ずしも「生命・生態中心主義」対「人間中心主義」といった形で相互に排他的に対立する必要もないという。

この点に関連して、ハンス・ヨナスの理論⁵⁾に注目することは意義がある。かつて筆者は、ヨナス理論に依拠し、「存在と当為」問題、および環境倫理学が主張する新しい責任概念を検討した⁶⁾。ヨナスは、現在の時代状況を、科学技術の

発達に伴う地球環境の危機と捉える。そこで、まず「人類の存続 (未来世代の生存権) を第一義」とし、「当為に対する存在の優位」⁷⁾を主張した。そこから他の当為を導出する、あるいは「人類の存続を第一義」とするという当為に基づき、他の当為を導出する。ヨナスのいう「人類」では未来世代の存続が重視されるため、「世代間公正」の達成が目指される。ヨナスの主張は明らかに「人間中心主義」である。しかし「人類の存続を第一義」とするためには全体論的な環境倫理の射程が必要であるという。このことは、シヴァの「緑の革命批判」⁸⁾などの成果と一致する。つまり、「生命・生態中心主義」と「人間中心主義」は互いに排他的である必要はない。

次に「善と正」の優先問題に移ると、筆者らは他の論文で、一般世界における「善と正の優先関係」の問題を課題とし、自由主義社会の倫理について現状分析 (事実判断) を行った⁹⁾。それを要約すると、自由主義社会は「近代的自我」を出発とし、それが変容する過程で、自由主義の前提であった「共和主義的精神」を喪失してきた。そして現在に至っては、その当然の帰結として、各自は負荷なき自我としてアトム的に存在し、価値基準を経済 (市場) に委ね、個人の欲望を無条件に解放するに至ったと評価した。そこで、1980年代における政治哲学上の自由主義の最大論敵である共同体論について検討した。共同体論者は、近代的自我とそれに基づく道徳理論を批判し、個人に先行する共同体を重視し、歴史的に形成されてきた共同体の伝統や慣行の中でのみ、個人は道徳的存在および政治的行為主体としての使命をまっとうできるとする。現在の自由主義が各自の自己決定を尊重しすぎ、各自のアトム化状況に起因する各種悪弊を憂慮し、筆者らは共同体論を支持した。つまり、一般世界における「正に対する善の優先」を導出した。

上で見た「存在」を重視するヨナス理論と、「善」を優先する共同体論は、補完的關係にあると捉える必要があろう。筆者らが提唱する「環境倫

理思想」とは、「存在」と「善」を優先する立場である。

2. 環境倫理思想に基づく「スポーツ世界の原則」

次に、上でみた筆者らの「環境倫理思想」に基づき、スポーツ世界の原則を提示する。

スポーツ世界の原則をどのように導出するかについて、スポーツ倫理学の先行研究では、スポーツ世界独自の原則を設定するものと、一般世界の原則を適用するものに大別できる。これは上でみた「存在と当為」の優先問題に該当する。本研究の立場からすれば、スポーツ世界の原則も、「人間存在を第一義」とする一般世界の根本原則から導出される必要がある。つまり、スポーツ世界のなかでどのように行為すべきかという以前に、スポーツ世界がどのように存在するか、という存在論が必要となる。現行の自由主義社会においては、特殊世界共同体¹⁰⁾を自由に形成することができる（結社の自由）わけであるが、そこには当然ながら条件がある。その条件は自由主義の原則に関係する。新たに形成された特殊世界共同体が、他の人々や他の集団に対して、危害を加えることがあってはならない。特殊世界共同体も、個人と同様に、自由主義の原則である「他者危害の原則」を満たさなければならない¹¹⁾。つまり、スポーツ世界での行為、あるいはスポーツ世界の存在自体が、一般世界における人間存在に害を及ぼすことは許されない。その害とは、直接的危害に限らず、人間存在を可能にする環境、あるいは未来世代の存在を危機におとし入れることも含む。この条件が満たされてはじめて、スポーツ世界は存在が認められる。

次にスポーツ世界共同体はいかにして維持されるべきかについて、スポーツ倫理学の先行研究では、個人の自己決定を最大限に尊重するものと、スポーツ世界共同体の理念、伝統を優先するものに大別できる。これは上でみた「善と正」の優先問題に該当する。本研究の立場からすれば、スポーツ世界においても一般世界同様、「正よりも善」を

優先すべきとなる。つまり、オリンピズムという理念、そしてオリンピックの伝統を重視すべきということである。ただし、一般世界で「善」を優先すべきということが、必然的にスポーツ世界でも「善」を優先すべきに対応するわけではない。しかし、本研究での「正」は、一般世界において、他者や自然を考慮できない利己的な個人を生みだし、そうした個人が「自己決定権」を楯に好き勝手に行為していると現状分析した。これはスポーツ世界にも該当する。一般世界に共和主義的精神あるいは共通善が復権し、環境問題に対しても有効な解決策が見出され、持続可能な社会が実現すれば、スポーツ世界は人々の自己決定を発揮する場として、環境に配慮しつつ（ミニマル・インパクト）、極端に言えば多少環境を破壊しようが、人々の自己決定を肯定的に捉えることも可能になるだろう。

以上の考察に基づき、本研究の提唱する「スポーツ世界の原則」は、①人間の一般世界における生存にプラスに作用する、あるいは少なくともマイナスにならないことに加え、②一般世界の共通善を回復するための前段階として、スポーツ世界共同体の共通善に従うこと、の二側面からなる。①は、スポーツ世界の存在条件であり、これを満たさねばスポーツ世界は存在自体が認められない。②は、スポーツ世界共同体をいかに維持するかということである。現状分析の結果、現在は個人の自己決定権が優先されすぎており、アトム化した個人が利己的に行為しているとの評価に基づき、共通善に従うことを優先した。この原則に基づき、具体的なスポーツ世界の規範が決定される。しかし、一度特殊世界共同体の規範が成立したとしても、それが決して不変であるということではない。各参加者の考えや行動（規則違反も含む）や、一般世界との関係、社会の価値観の変化等によって、特殊世界の規範も変化するものである。変化しないものは、その特殊世界を成立させている本質、マッキンタイア¹²⁾がいう内的善とでもいうべきものだけである。音楽世界であれば、楽器

や声などによって観客の聴覚に訴えるということは変わらないし、絵画世界であれば、描く素材や絵の具がどのように変化しようとも、見る人の視覚に訴えるということは変わらない。とすると、ここでは「スポーツの本質とは何か」ということが問題になる。これは非常に難しい問題であるが、ここでは、「スポーツとは、同意されたルールによって規制された制限の範囲内で、どちらが空間時間の中で身体／用具を動かす能力に優れているかを、互いに試し合うこと」¹³⁾ という定義が適切であろう。スポーツがもともととは賭の対象として始まろうが、現在は様々な付加価値が付随しようが、スポーツを脱価値的に捉えるならばこのように言えるであろう。人々はその独自の世界が面白いと思うから行うのであり、それを面白い、あるいは役に立つ、利用できると思うから見たり資金を提供したりするのである。確かに本研究におけるスポーツは西欧の価値観の中で誕生した。したがってもともと価値的に中立ということはない。しかしスポーツそれ自体は極めて無意味で無価値なことであると指摘する論者もいる。スポーツは「ある定められた距離を走る（中略）。あらかじめ設置されたゴール・ポストにボールを投げ（蹴り）入れる（中略）。ボールを打ちあって相手にミスさせる（中略）。つまり本質において、ただそれだけのことをするのであり、これはたとえば子供が浜辺の砂を右から左へ移すのと同様、それ自体の中に生産性とか道徳性とかの価値を云々できる行為ではない。更には100メートルを10秒で走ろうが9秒で走ろうが、また球技でいくら得点を重ねようが、そのもつ社会的かつ経済的な、つまり二次的な意味をことごとく取り去っていけば、やはりそれはただそれだけのことであるにすぎない。（中略）煎じつめれば身も蓋もないことをするのがスポーツである」¹⁴⁾。このように政治・生産的という点から見れば、スポーツとは全く価値的に中立なものである。しかしだからこそ、政治や経済に利用される可能性は常にある。

スポーツという行為自体は政治・経済的な価値

に中立であるとしても、それが共同体として成立するためには、その共同体の共通善、理念、伝統といったもの、つまりスポーツ世界共同体の善が必要となる。

Ⅱ. 具体的事例への適用

本研究で設定するスポーツ世界の原則は、①人間の一般世界における生存にプラスに作用する、あるいは少なくともマイナスにならないことに加え、②一般世界の共通善を回復するための前段階として、共同体の共通善に従うということであった。スポーツにおける違反行為の分類についてはいろいろな仕方が考えられるだろうが、本研究ではスポーツの違反行為を次の4つに大別する。1) 過失・偶発的な反則行為、2) 意図的な反則行為、3) スポーツ行為を超える意図的な反則行為、4) 大会規定違反、の4つである¹⁵⁾。このうち1)～3)はスポーツ場面において生じる反則であり、すべてスポーツルールによって処理される。4)は大会規定によって決定されている。またスポーツ倫理の対象となるのは2)～4)であると考えられる。それぞれについて考察を進める。

1. 過失・偶発的な反則行為

この種の反則行為は、バスケットボールのトラベリング、バレーボールのタッチネット、サッカーのオフサイド、ラグビーのスロー・フォワードやノックオンなどの反則である。これらの反則は意図して行われるものではなく、まさに偶発的に、あるいは過失によって生じるものである。この種の反則はすべてスポーツルールによって処理される。倫理的な善悪の対象とはならない。

2. 意図的な反則行為

意図的な反則行為は、自分が反則をしないよりも反則をした方が、たとえそれによって何らかの罰則があっても、有利になると判断した場合に行われる。例を挙げると、アメリカンフットボールで点数をリードしているチームが制限時間内にわ

ざと次のプレイを開始しないこと（これは「ディレイ・オブ・ザ・ゲーム」と呼ばれる反則で、この反則をすると5ヤードの罰退が課せられるが、ゲームの残り時間を少なくすることができる）、バスケットボール（NBA）で残り時間が少なくなり、負けているチームがわざと相手にファールすること（相手にフリースローが与えられるが時間を止めることができる）などの反則である。この反則は意図的に行われることが特徴である。この種の反則もすべてスポーツルールによって処理される。スポーツにおける意図的な反則行為に関する先行研究はいくつか存在するが¹⁶⁾、スポーツにおいては意図的な反則も偶発的な反則も同じものとして扱われることがその特徴であるといえよう。

スポーツ場面における意図的反則行為がどのように処理されるか考えてみよう。スポーツ場面においては、1) 過失・偶発的反則行為も2) 意図的反則行為も同じものとして扱われ、同じようにスポーツルールによって処理される（日常世界においては、意図的に悪の行為をしたのか、偶発的に悪の行為になってしまったのかは大きな違いである）。スポーツルールは、反則が意図的であるか否かに関わらず、全て行動として捉えていて、行為としては捉えていない。つまり、スポーツルールから見ると、スポーツルールは反則の意図を斟酌したりしないのである。極くまれな例として、同じ反則行為でも、意図的か否か（悪質か否か）の判断をレフェリーに任せ、それによって罰則が異なるものもある（アメリカンフットボールのフェイスマスクの反則。これはレフェリーが意図的か偶発的か判断し、前者は15ヤードの罰退、後者は5ヤードの罰退となる）。そして、スポーツ場面における反則は、全てスポーツルールによって処理されるし、処理できるようになっている。

スポーツ場面における意図的反則行為と、日常世界における意図的に悪の行為を行うことを比較することによって、行為におけるスポーツ世界の独自性を明らかにすることが可能である。

日常世界において、悪の行為（法律などに反する行為）であるを知っていて、それを意図的に行うということは、全て（倫理的にも）悪であり、法律などによって処罰される。この場合、日常（倫理）的な善悪の判断基準が適用される。その理由は、倫理的非難を受け、その人の人格上の評価に少なからぬ影響が及ぶということである。日常世界で悪の行為を行うと、違反の大きさによって罰則が与えられ、犯罪を行うと前科何犯という負の評価がその人に付加される。日常世界において悪の行為を行うことは、意図的であれ、偶発的であれ、その行為を悪と知らずに行ったのであれ、結果的に全て悪の行為となる。しかし悪いと知っていたか知らなかったか、あるいは意図的か偶発的かによって罪の重さは異なる。法律上の情状酌量である。

スポーツ場面での反則行為は全てスポーツルールによって処理され、日常世界における悪の行為（法律に反する行為）は法律などによって処理される。両者の違いは、前者がスポーツ世界のことにだけに留まり、倫理的非難や人格上の評価には影響がないのに対し、後者は倫理的非難と人格上の評価に影響がある点である。スポーツ場面においては、意図的に反則行為をすることも想定されて（許されて、認められて）いる。意図的反則を行っても、単なる反則であり、日常（倫理）的な意味での悪ではない。よってそれをして倫理的非難や人格上の評価に影響を受けるものではない。意図的反則も単なるルール違反として、スポーツルールによって処理される（できる）。これが行為におけるスポーツ世界の独自性である。

これを法律とスポーツルールの側から見ると、法律は日常世界の悪の行為を想定しているというよりは、もしも起こった場合には対処するという意味合いが強いのにに対して、スポーツルールはスポーツ場面（競技内）の反則行為を想定しているといえる。

それでは、なぜこのような行為におけるスポーツ世界の独自性（意図的反則をしても倫理的非難

や人格上の評価には無影響) というものが必要なのであろうか。それは、いちいち日常の倫理的判断基準をスポーツ世界に持ち込んでいたら、スポーツは成立できないし、継続することができないからである。スポーツ世界の維持が、スポーツルールによって処理され、倫理的には判定されないことによってはじめて可能になる。スポーツ世界は、ある面では非常に脆弱な世界である。例えば、あの超人的な動きを見せるNBA(アメリカのプロバスケットボール)の試合においてさえも、一人の幼児がコートに紛れ込んだだけで、試合を続行することは不可能である。このようにある意味では脆弱なスポーツ世界を維持するために、スポーツルールが必要となる。意図的であれ偶発的であれ、反則が発生すれば、スポーツルールに則って処理すること(倫理性を問わない)によって、次のプレイに進めるのである。脆弱なスポーツ世界が壊れないために、スポーツルールによって瞬時に処理される必要がある。

3. スポーツ行為を超える意図的な反則行為

この種の意図的反則行為は、試合(ゲーム)中における、情動等による殴打等の暴力行為である。具体例を挙げると、コンタクトスポーツにおいて相手の肘がぶつかったとか、ユニフォームを引っ張られたことが原因で、相手を殴る行為とか、審判の判定に納得できずに暴言を吐く行為である。これらの行為は、2)意図的反則行為とは異なり、ゲーム(試合)における利益・不利益を判断して行う行為ではない。冷静なときは、これらの行為が悪いと知っているはずである。情動や感情によって、善悪の判断ができずに行ってしまう反則行為である。この種の反則も基本的にはスポーツルールで処理される。大抵の場合は退場処分となる。さらにその後の一定期間出場停止などの処分を課されることになる。しかしスポーツルールで処理されるのは、そのゲームを続行するためにやむを得ず取る処置である。この種の反則行為は、先に検討した2種類の反則行為とは異なり、

スポーツ世界の行為とは見なされないことが特徴として挙げられる。つまりこの種の反則はスポーツルールで想定されていることを超えた行為である。

スポーツルールで想定されていることを超えてしまった行為は、スポーツ世界の行為とはみなせない。よって先に見たように、スポーツ世界の行為の独自性から、この種の反則行為は倫理的な非難もうけるし、人格上の評価に影響も受ける。要するに日常的な善悪の判断基準が適用される。ラグビーの試合中にラフプレイによって相手選手の耳を噛みちぎってしまったり、野球の試合で審判に不服があるからといって審判にボールを投げつけて、けがをさせる可能性があったり、情動による暴力行為によって相手選手が日常生活にまでも支障をきたすようなことになれば、当然日常の倫理が介入する。けがをさせられた側の人は裁判に訴えることもできようし、損害賠償を求めることもできよう。

このように、スポーツ世界での行為は、基本的には、意図的な反則であっても倫理的な非難や人格上の評価に影響を及ぼすものではないが、スポーツルールで想定されているものを超えてしまう場合には、スポーツ世界から日常世界に飛び出し、日常の倫理的な判定基準が適用される。八百長、相手選手への傷害、ファンの言動(フーリガン、ミスした選手の殺害等)なども、このスポーツルールの想定を超える行為として、日常世界の原則にしたがって処理されることとなる。

4. 大会規定違反

(1) 薬物ドーピング問題

この種の違反の代表例は薬物ドーピング問題である。

スポーツ世界は一般世界にアピールすることの重要性を認識している。例えば、オリンピックなどでプロのアスリートの参加を認めて、一層人々にインパクトを与え、アピールしていこうというのが、現在の状況である。それならば、より良い

パフォーマンスや記録を求めて、薬物ドーピングを行っても良いではないかということになるが、はたしてそうであろうか。先に見たように、本研究で設定する基準は、①人間の一般世界における生存にプラスに作用するあるいは少なくともマイナスにならないことに加え、②一般世界の共通善を回復するための前段階として、共同体の共通善に従うということであった。本研究ではこの両方の基準に薬物ドーピングは反すると結論付ける。薬物ドーピングが②に反することは言うまでもないが、①に対しては半谷理論が適用される必要があると考える。このことについて考えてみよう。

一般世界における薬物ドーピングの理由、つまり、カッコいい身体になりたい、アーノルド・シュワルツェネッガーやシルベスター・スタローンのような身体になりたいなどの理由で、私的に薬物を使用することは認められるかどうか考察してみよう。ここではステロイド類の使用に限定して考察しよう¹⁷⁾。

この問いに対して筆者らは禁止できると考える。一般世界で禁止が正当化されるためには、基本的には他者危害原則の適用が条件である。次のように考えると、一般世界における私的薬物使用も他者危害原則に抵触する。ステロイド類に限らず禁止薬物にはさまざまな副作用があるとの報告は多い。もちろん人体実験は行えないし、薬物に対する反応にも個人差があると考えられるので、絶対に確実とは言えない。だが使用者に害をもたらすというだけでは使用禁止の根拠にはならない。それらは愚行権として認められる必要がある。しかし次のような報告がなされた場合、それを愚行権として処理するわけにはいかない。全米大学スポーツ医学局（American College of Sports Medicine）は他の主要な医学組織と同様、ステロイドの重大な副作用について警告している。多量・高頻度で服用すると、少なくとも肝臓障害、動脈硬化、高血圧、精子数低下、女性の男性化といった副作用がある。また、ステロイドを常用すると、攻撃性や敵対心の増加といった人格変容を

きたすと主張している¹⁸⁾。記憶に新しいところでは、日本でも1993年11月に、横浜中華街でステロイドを常用していたという男性が殺人事件を起こし、ステロイドの副作用のせいではないかと注目を集めた。このように、ステロイドの副作用として攻撃性や敵対心を増加させると主張するとき、日常世界においても麻薬と同様にステロイドの使用が他者危害原則の適用対象となり、法律として禁じられることになるだろう。これについては、何もステロイド類が人格を変容させ、攻撃性や敵対心を増加するという副作用が科学的に証明される必要はない。その根拠は半谷¹⁹⁾の考え方、そして「間接反証責任論」を適用すべきである。これらはいずれも水俣病から導き出された理論である。

半谷は、工場排水が水俣病の直接の原因であることを科学的に証明するまでは工場の操業を停止しないという、当時の考えを批判している。つまり有機水銀中毒の原因はチッソの排水が原因である可能性が非常に高かったが、それを当時の科学の力で証明するまでには多大な時間がかかり、そのために被害を拡大してしまったと反省する。水俣病のように、人々の生命や安全に関することについては、まず工場排水を停止し、工場排水が原因ではないことを科学的に証明してから工場の操業を再び認めるべきであったと述べている。要するに、「疑わしきは罰する」（この場合は疑わしきは操業を停止する）である。

「疑わしきは罰せず」と「疑わしきは罰する」のいずれが適切かの使い分けについては、武谷の考えを適用するのが良いと思われる。武谷の考えとは、「疑わしきは罰せず」を適用するのは犯罪の場合であり、人々の生命・安全に関することは「疑わしきは罰する」を適用するというものである²⁰⁾。水俣病も薬物ドーピングも、人々の生命・安全（この場合の安全とは使用者の生命・安全ではなく、他者に危害を及ぼさないこと）に関しては同じである²¹⁾。「間接反証責任論」は1971年の新潟水俣病判決での原告全面勝訴の根拠であり、「汚染源の追求がいわば企業の門前にまで到達し

たならば、原因物質の排出については、むしろ企業側において、自己の工場が汚染源にはなりえない理由を証明できないかぎり、事実上すべての法的因果関係が立証されたことになる」²²⁾ ということなのである。これらをステロイド類に応用すると、ステロイド類の使用は他者に危害を加える危険性が指摘されているが、服用量や頻度、さらに個人差など、その危険を科学的に証明することはできない。だがそれが他者の生命にまで影響を及ぼす可能性があるかぎり、ステロイド類の使用がまったく他者に危害を加える可能性がないことが証明されないかぎり、ステロイド類の使用に関しては法的に規制されるべきである、となろう。さらにこの点に加え、「世代間倫理」にも抵触する可能性がある。つまり薬物の副作用が次世代に危害を及ぼす可能性があるという点である。この点についても次世代の他者に危害を加える可能性がないことが証明される必要がある。「間接反証責任論」、さらに「世代間倫理」の考えを適用すれば、自由主義に基づく一般世界ではステロイド類の私的使用は麻薬同様に禁止される。したがって本研究で提唱する二つの基準のいずれにも、薬物ドーピング（ステロイド類）の使用は反することになる。したがって薬物を使用するかしないかはアスリートの自己決定権には含まれない。

薬物ドーピング問題に関して、たとえば、副作用のない薬物は使用しても良いのか、という疑問が生じるかもしれない。現にサマランチIOC会長はこのような発言をして物議をかもしている。ここでは薬物使用が使用者に害をもたらすということから議論しているわけであるが、もし副作用のないパフォーマンスを向上させる薬物が製造できたら、その薬物は使用可能にすべきなのかという疑問が生じる（もっともそのような物質を、薬物とは呼ばないと思われるが）。この問題はスポーツ世界に限ったことではなく、身体に害がなければ、人間の能力を改良する物質を摂取しても良いのか、ということである。遺伝子操作などがこの問題に含まれるが、この問題については本研究では

深く扱わない。しかし筆者らの考えを簡単に示すならば、薬物が人間の本質（personal integrity：人格的統合性）を変えてしまわないのならば、使用可能にしても悪くはないかもしれない。そのためには人間とは何か、少なくとも人間の身体や身体能力の定義を定める必要がある。今回この定義については詳しく触れないが、そこまでして人間が進化していく必要があるかは疑問である。進化する必要があるなしに関わらず、そこまでして競技をする意義はないと思われるし、今以上に問題が増えることは容易に予想できる。たとえ薬物の使用に関して入手の機会を均等（公平）にしたとしても、薬物に反応する身体は各自異なるわけであり、結局公平とは言いがたい状況を生じるだろう。そのため、このような薬が承認された後は、その薬によりよく身体が反応するような薬物も使用されるようになるだろう。また、今以上に、その薬物を用いなければトップ・レベルを維持できないという状況をつくり出してしまう。これらの特殊な集団は、現在以上に一般人とは異なる種類の存在であり、人間が造りだしたロボットやキャラクターや駝鳥などと競争していればよいということになるだろう。

さらに現在使用が認められているビタミン類と禁止薬物の違いは何か、などさまざまな疑問を呈することもできよう。1993年におけるIOC認定・使用可能薬物リストの、薬物分類21. ビタミン剤および無機塩類製剤のところには、次のように記されている。「すべてのビタミン剤および無機塩類製剤の使用は認められている。しかし、“ビタミン剤”と称する製剤のなかには、精神運動刺激剤や蛋白同化剤のような禁止薬物を含有するものがある」。この文からもわかるとおりビタミン類は使用が認められている。ビタミン類と禁止薬物の違いは何なのだろうか。サイモンは、現在使用が禁止されている競技力向上薬物の種類と、使用が認められているビタミン剤やアレルギー症状の緩和剤とを、明確かつ簡潔に区別する定義があるとは思われないと述べている²³⁾。使用者

に害があるという点からすると、競技力向上薬物は前述したように、健康に害があると考えるのが適切であると思われる。ビタミン剤やプロテインなどは、一般的な使用では害はない。しかし多量に摂取しすぎると何らかの害が生じることが予想されるが、これはほとんどすべての食物に共通するだろう。競技力を高めるという点からすると、薬物もビタミン剤も、程度の違いはあるが、どちらも競技力を高めるということで、共通であるといえる。もっとも両者の競技力を高める種類はだいぶ異なり、ステロイドなどはある程度長期間にわたって競技力を高めるのに対して（そのためのトレーニング期間も長く必要である）、ビタミン類などは一時的に競技力を高める。ただし、薬物でも麻薬性鎮痛剤・興奮剤などは一時的なものである。一時的ではあるが、死を招くこともある。

これらについては本論文で扱う範囲を越えるものであり、ここでは解答することはできない。

（２）自己決定とパターナリズムの問題（辰吉の事例から）

ここでは自己決定権が直接問題となった事例を見てみよう。最近話題となったスポーツ世界における自己決定とパターナリズムをめぐる事例としては、ボクシングの辰吉選手の件がある。日本ボクシング協会（JBC）は、一度網膜剥離になったプレイヤーは再び（日本の）リングには上がれないことを規則に定めていた。機関側の言い分は、プレイヤーの健康を第一に考える、そして同じ状況になったプレイヤーを守るというパターナリズムである。さらに社会的影響力（社会悪）や他者危害原則も考慮していると思われる。これに対して辰吉選手側の言い分は、辰吉選手は成人であり、愚行権を含めて自己決定権がある、というものである。この事例について考えてみよう。

本研究で設定する基準は、①人間の一般世界における生存にプラスに作用するあるいは少なくともマイナスにならないことに加え、②一般世界の共通善を回復するための前段階として、共同体の

共通善に従うということであった。②の基準に照らせば、プレイヤーの自己決定は制限されることになる。では①の基準ではどうなるか。つまり一般世界においてはこのような自己決定は認められるべきであろうか。結論から言うと、加藤が指摘しているように、このケースは自由市場主義に委ねてよいケースであると考えられる。その基準は、その「悪いこと（もの）」を認めても社会的混乱が生じないと思われるもので、希少例の場合である²⁴⁾。ただし「悪いこと」の範囲や性質が「他者危害原則」などにしたがって吟味される必要はある。辰吉選手の場合は、この自由市場主義に委ねてよいケースである。今後網膜剥離が完治したボクサーがリング復帰を望んでも、それは社会全体から見れば希少例であり、それを認めても社会的混乱が生じるとは思えない。このような自己決定をしたボクサーが将来目に何らかの障害をかかえるケースが増えれば、このような選択は自然淘汰されるであろう。この事例に対する日本ボクシング協会の措置は、辰吉選手に限り特例としてリング復帰を認めるという、世界ボクシング評議会（WBC）からの圧力に屈した形の中途半端なものであり、批判は免れない。

いずれにしても先の薬物ドーピングの事例とは異なり、本研究で設定する２つの基準に照らして評価が分かれるこのような事例をどうするかは難しい。この事例に関して近藤²⁵⁾は、辰吉選手の自己決定を尊重すべしという態度を取る。それは近藤が、日本においてはリベラリズム、すなわち個人の確立をさらにすすめる必要があるとの判断に基づく。これは第２章で見たように、本研究の立場とは正反対である。この事例に対して本研究でははっきりした態度を示すことは不可能であるが（何でもかんでも現在決まっていることを守らなければいけないと本研究は主張しているわけではない）、近藤のように自己決定を優先すべしと結論付けることはできない。この問題の背景には、同じケースが欧米では認められているということがある。このことは、日本における自己決定を含

む個人の権利意識が、欧米のそれに比べて低いことの証であると考えられる。だが権利意識が高ければよいとも一概には言えない。今後さらなる議論が必要といえよう。

(3) アマチュアとプロフェッショナルの問題

ここではアマチュア規定について考えてみよう。アマチュアリズムは1974年に廃止されている。しかし近代オリンピックが成立してから長きにわたって、それはスポーツ世界独自の倫理観の代表例であったといえよう。それはおそらく1960年代以降、スポーツ世界、オリンピックに関係する人々の差異化によって、廃止されるに至った。これはより多くの人に参加機会を認めるというスポーツ世界の取ってきた戦略である「大衆化」、さらには「私益化」に適うものである。

現在の悪弊を、個人の極端なアトム化に求める本研究の立場からすれば、アマチュア規定の廃止はスポーツ世界にとって大きな転換点であったといえよう。一般世界、スポーツ世界ともに私益化を最大限に肯定し、これによって価値観において、スポーツ世界が一般世界を単に反映することになったからである。しかし当時アマチュア規定が廃止されたことに対して、私たちが倫理的に善悪を論じてあまり意味はない。当時はコミュニタリアニズムの主張よりも前の時代であり、ある面では一般世界においてもリベラリズムを徹底する必要があったとも言えるからである。ここで考えてみたいことは、現在の状況において、このアマチュア規定をどう評価できるかである。本研究で設定する基準①では、アマチュア規定は現在においてこそ必要であるといえよう。つまり一般世界において、私益化に歯止めをかけるような何らかの価値観といったものが要請されているといえよう。一方基準②においては、アマチュア規定を復活させようとすることは、それを廃止してきたスポーツ世界の伝統に反することになる。

以上の考察より、アマチュアとプロフェッショナルの問題は、先に見たパターナリズムと自己決

定の事例と同様に、本研究の設定する基準①と②で評価が分かれるという点で一致する。つまり辰吉の事例における自己決定権は、①では認められるが、②では認められない。アマチュア規定は、①では現在こそそれが要請されているのに対し、②ではその廃止が支持されることになる。

このように①と②で評価が分かれる事例は難しいが、アマチュア規定の問題は、①の基準のまさに根本にある問題である。つまり一般世界を良くしていくためには、経済的な私益化をいかに抑制できるかという点にかかっている。したがって本研究ではアマチュア規定は現在においてこそ要請されていると評価したい。

ただし、アマチュアリズムの問題はより一層詳細に検討すべき課題である。従来のアマチュアリズムを復活させるべしと簡単にはいえない。現在ではアマチュアとプロフェッショナルの境界は曖昧であり、両者を明確に区別することは困難である。さらに、アマチュアリズムの基本的特徴に「スポーツ愛好精神」が考えられ、これがアマチュアリズムを考えるうえで重要になると考えられるが、この考えに則れば、バスケットボールのドリームチームのような高収入を得ている者が、オリンピックにおいて国家のためにボランティアの気持ちで収入を度外視して参加することも、新しい形のアマチュアリズムに位置付けられよう。「スポーツ愛好精神」を詳細に考察すれば、以下の三つの立場が想定できると考えられる。1) 現在未成年であり、プロとしての将来は不安定である愛好者の立場、2) すでにプロとして成功し、巨額の報酬を得ている立場の者が、そのスポーツ愛好のゆえに、採算を度外視して名誉をかけて参加する場合、3) 現在プロがない種目の愛好者で、知名度が高くなれば、プロに準ずる収入、あるいはプロ宣言をして収入を確保しようとする立場。これら三つの立場について、本研究の立場から解答を試みるなら、収入は一般世界の問題であり、スポーツ世界の問題ではない、と区別することができる。スポーツ世界の問題としては、スポーツ愛

好精神の発揮が重要といえる。特に一般世界の規定に抵触する暴力行為などのアンフェアな行為はスポーツ愛好精神に悖るものとして厳しく取り締まられるべきである。大会を組織する役員は、一方ではスポーツ世界内に片足を入れ、他方では一般世界にもう片方の足を入れているようなところがある。後者に体重の大部分が置かれるようになってきたのが歴史経過といえよう。この意味でも、選手以上に役員にアマチュアリズムを徹底させる必要があると考えられる。

いずれにしても、アマチュアリズムについてはより詳細な検討が必要であり、この点については今後の課題にしたい。

おわりに

本研究では、筆者らが提唱する環境倫理思想に基づくスポーツ世界の原則（①人間の一般世界における生存にプラスに作用する、あるいは少なくともマイナスにならないことに加え、②一般世界の共通善を回復するための前段階として、共同体の共通善に従うこと）を、代表的な具体的事例に適用した。具体的事例を、本研究では、1) 過失・偶発的な反則行為、2) 意図的な反則行為、3) スポーツ行為を超える意図的な反則行為、4) 大会規定違反、の4つに分けて考察した。このうち、倫理学の対象になるのは3)と4)である。

考察の結果、3)の事例は、スポーツルールの想定を超える違反行為であり、一般世界の価値判断が適用されることが明らかになった。4)の事例については、薬物ドーピング問題、自己決定とパターナリズムの問題、アマチュア規定をめぐる問題を取り上げた。「存在と善」を優先する本研究に基づけば、未来世代の存在を考慮し、現行の自己決定権を制限し、金銭的欲望を抑制することが要請される。来世紀、真に持続可能なスポーツ世界、そして持続可能な社会を構築するためには、「存在と善」を優先することが必要であり、本研究で提示した新しい価値観、そして私たちには厳し

い自己抑制が求められる。本研究の成果に基づけば、商業主義を推進しながら環境に配慮できると考えている現行のスポーツ世界（特にオリンピック）は、大幅な修正を余儀なくされるであろう。

引用・参考文献

- 1) 伊藤俊太郎：「現代文明と環境問題」、伊藤俊太郎編、『環境倫理と環境教育』（講座文明と環境第14巻）、1、朝倉書店、東京、1996。
- 2) 森田啓：「スポーツ倫理の機序とスポーツ世界の方向性：環境倫理思想を基礎に」、筑波大学大学院体育科学研究科、博士論文、1999。
- 3) 「世代内公正」と「世代間公正」の二つに分けて考えることができる。
- 4) 関根靖光：第三倫理への道、中村友太郎、関根靖光、小林紀由、瀬本正之編著、環境倫理：「いのち」と「まじわり」を求めて、北樹出版、160-185、1996。
- 5) Jonas, Hans, Das Prinzip Verantwortung, Frankfurt am Main, 1979 (Dritte Auflage, 1993)
- 6) 森田啓：「スポーツ世界への環境倫理思想の適用可能性に関する研究～ハンス・ヨナスを中心にして～」、『体育思想研究』、3:53-69, 1998。
- 7) a.a.O., S.96-102.
- 8) V. シヴァ（高橋由紀、戸田清訳）、生物多様性の危機、三一書房、1997など。
- 9) 森田啓、片岡暁夫、近藤良享：「スポーツ世界と一般世界における「善と正」に関する一考察～SchneiderとBurkeの論争から～」、『体育・スポーツ哲学研究』、20(2):25-43, 1998。
- 10) スポーツ世界もそのひとつと考えられる。
- 11) 個人ではなく、集団の責任を認めるということは、ヨナスが主張した新しい責任概念である「集団的責任」を具現化するものである。
- 12) MacIntyre, Alasdair: After Virtue: A Study in Moral Theory (Second Edition), Duckworth, 1985.
- 13) この文章は、フレイリーが「スポーツの試合の存在目的」について述べていることを応用した。フレイリー（近藤良享他訳）：『スポーツモラル』、不昧堂出版、1989, p.56.参照。
- 14) 守能信次：『スポーツとルールの社会学』、名古屋大学出版会、67-68, 1984。守能は文脈上あえて極端な指摘をしている。私たちは「スポーツ」をすることに無限の価値を見出すことができよう。
- 15) ここでの分類、および考察については森田啓の修士論文「スポーツにおける違反行為の哲学的研究～薬物ドーピングを中心として～」(筑波大学平成6年度修士論文)を基礎にしている。
- 16) Fraleigh, W.P.: "Why the Good Foul Is Not Good" in Morgan, W. and Meier, K. (Eds.), Philosophic Inquiry in Sport, Human Kinetics, 1988.

Leaman, C.K.: "Can Cheaters Play the Game?" in Morgan, W. and Meier, K. (Eds.), *Philosophic Inquiry in Sport, Human Kinetics*, 1988.

Wertz, S.K.: "The Varieties of Cheating" in *Journal of the Philosophy of Sport*, Ⅷ, 1981. など。

- 17) 一言に禁止薬物といっても、多くの種類がある。IOCが指定している禁止薬物の種類は、興奮剤、麻薬、筋肉増強剤、ベータ遮断剤、利尿剤、ペプチドホルモン、の6種類である。これらの薬物は、即効性のあるもの（試合当日に使用するもの）と即効性のないもの（日常のトレーニング期間に使用するもの）、薬物の体外排泄を促進させるもの、に大別できる。これらをまとめて議論することは難しいし、効果的ではない。アナボリック・ステロイド類は、即効性のある興奮剤などとは異なり、トレーニングと併用することによって効果のある薬物である。
- 18) Todd, T.: "The Steroid Predicament," in *Sports Illustrated*, August 1, 71-72, 1983.
- 19) 半谷高久:「科学の論理と水俣病」, 都留重人他編, 『水俣病事件における真実と正義のために—水俣病国際フォーラム（1988年）の記録—』, 勁草書房、122-123, 1989.
- 20) 武谷三男:『安全性の考え方』(岩波新書)、221, 岩波書店、東京、1963.
- 21) ただし、生命・安全に関することは全てなんでもかんでも禁止しろというのではない。極端に言えば、人間は生きていること自体危険がつきまとう。この基準について明確に示すことは難しいが、それぞれのケースを慎重に検討する必要がある。以上のことから考えて、薬物ドーピングが身体に及ぼす影響については確実なことは証明されていないが、人格変容をもたらし、攻撃性や敵対心を増加させるという副作用があるものとして議論することが適切であろう。
- 22) 丸山徳次:「文明と人間の原存在の意味への問い」、加藤尚武編『環境と倫理』、有斐閣、35-36, 1998.
- 23) Simon, R.L.: *Fair Play*, Westview, 73-74, 1991.
- 24) 加藤尚武:『応用倫理学のすすめ』、丸善、56-57, 1994. 加藤は自由市場主義に委ねて良い例として、命名の際の悪い名前を挙げている。たとえ悪い名前をつけたとしても、それによって、命名について、それ以後社会的混乱は生じないと考えられるので、法的に規制する必要はない。希少例は度外視するという方針であり、この考え方は、悪い名前は自然淘汰されるだろうから、法的に規制する必要がないという、一種の自由市場主義である。
- 25) 近藤良享:「スポーツにおける自己決定とパターンリズムに関する基礎的研究: 辰吉選手問題を事例として」、『体育・スポーツ哲学研究』、20(1):15-30, 1998.